

## 情報を整理するということ

森 雅秀 (比較文化)

### 1. 文房具の話

スティックのりと液体のりの違い  
ラインマーカー  
クリップいろいろ  
ファイリング・システム  
大学生協の文具カタログ

### 2. 参考文献リストを作る

「文献検索の方法」の後は？  
インプットからストックへ、そしてアウトプットへ  
参考文献というデータベース  
ソフトウェアは不要  
5千件の論文の整理  
参考文献に対応するファイリングシステム

### 3. 『知的生産の技術』とその類書

知的生産の美学 (梅棹)  
インプットとアウトプット (立花)  
情報は整理しない (野口)  
押出しファイリングシステム (野口)

### 4. デジタル・データの扱い方

デジタルデータは永遠か？  
(FD, MO, ZIP, HD, MemoryStick, CD, DVD 累々たる屍)  
バックアップ (何にとるか、自動保存機能→環境設定)  
ファイル名 (連番、日付、日本語/アルファベット、文字数、リネーム)  
拡張子 (txt, doc, xls, ppt, pdf, jpg, tif)  
データとデータの区切り (タブ、カンマ→csv 方式)  
画像データの扱い (圧縮、可逆か不可逆か、重さ、表示)  
画像データは再現不可能  
デジカメでとったらどうする (ファイル名、raw、jpg、サムネイル)  
何のためのデータか (自分で楽しむ、HP に、友人に、出版)

情報収集と整理の to do, not to do (べき集・べからず集)

情報は一元的に管理する

可能であればオリジナルの形態を維持する

情報はできるだけ規格を統一する

1 件のデータには 1 件の情報のみ

整理することに時間とエネルギーを浪費しない

つねにアウトプットすることを意識する (何のための情報収集か)

自分の記憶に頼りすぎない

紙の裏は使わない

分類するときこそオリジナリティを

パソコンを過信しない

機械に依存する記憶媒体を信用しない

つねにバックアップをとるべし (パソコンからの分離)

とりあえずプリントアウト (電子化は紙の節約にはならない)

検索することを前提にしてデータを保存する

## 知的生産の箴言集

### B6 カード（京大式カード）について

「カードについてよくある誤解は、カードは記憶のための道具だ、というかんがえである。・・・これはじつは、完全に逆なのである。頭の中に記憶するのなら、カードにかく必要はない。カードにかくのは、そのことをわすれるためである。」（梅棹 1992、pp. 48-49）

「カードの操作のなかで、一番重要なことは、組みかえ操作である。知識と知識とを、いろいろに組みかえてみる。あるいはならべかえてみる。そうするとしばしば、一見なんの関係もないように見えるカードとカードのあいだに、おもいもかけない関係が存在することに気がつくのである。そのときは、すぐにその発見をもカード化しよう。そのうちにまた、おなじ材料からでも、組みかえによって、さらにあたらしい発見がもたらされる。これは、知識の単なる集積作業ではない。それは一種の知的創造作業なのである。」（梅棹 1992、p. 51）

「カード法の初心者は、たいてい1枚のカードにたくさんのかきすぎて失敗するようだ。おもいきって、ちいさい要素にわけた方が成功する。1枚のカードに1行しかかいてなくてもかまわないのである。カードをけちっていたのでは、カードはつかえない」（梅棹 1992、p. 50）

「自分の知識や思想を、カードにしてならべてみると、なんだ、これだけか、という気がして、自尊心をきずつけられるような気がするのである。・・・カードをつかうには、有限性に対する恐怖にうちかつだけの、精神の強度が必要である。」（梅棹 1992、p. 54）

「だいじなことは、カードをかく習慣を身につけることである。どうしたら、その習慣が身につくか。根気よくつとめるほかはないのだが、たとえば、つぎのような方法はどうか。それは、おもいきってカードを1万枚くらい発注するのである。1万枚のカードを目の前につみあげたら、もうあとへひくわけにはゆくまい。覚悟もきまるし、闘志もわくというものだ」（梅棹 1992、p. 56）

### 参考：「知的生産の神様」に会う

「はじめてお目にかかった梅棹さんに、・・・夢中で十数年に及ぶ梅棹式仕事術との格闘をお話しした。そして、十四年を経過した「その後の知的生産の技術」についてお話ししていただけないかと、切り出した。・・・このことがきっかけとなって、私は自称、梅棹さんの弟子となった。そしてあるとき、思いきって「私はB6カードを先生がおっしゃるように一万枚も買って、結局破綻しました」と、白状した。すると、「そうや、それでええのや」とおっしゃっ

た。つまり、B6 カードを手掛けることは、各人が自分なりに情報整理とはどういうものを学ぶことに意味がある。あなたはそれによって自分なりの整理法を見つけた、それでいいのだ、というのである。この懐の深い言葉には、唸った。」（山根 1992、pp. 7-8）

### 読書することのコペルニクスの転換

「本というのは、一ページ目から読みはじめて、最後のページまで読むものなのだ、というような固定観念は捨てることである。ではどこが必要で、どこが必要でないかをどうやって見分けるか。何より重要なのは、自分が何を必要としているのかを明確に認識しておくことである。なんでもないことのようにだが、これが一番重要なのである。」（立花 1984、pp. 18-19）

### 情報のインプットの落とし穴

「資料の整理と保存にかかる手間は少なければ少ないほどよい。・・・資料の収集整理という作業を一度組織的にはじめてしまうと、だんだんそのこと自体が自己目的化してしまって、かんじんの本来の目的（アウトプット）を忘れてしまうということがしばしば起こるからである。」（立花 1984、p. 34）

### 収納が先、秩序は後<押し出しファイリング・システム>

「押し出しシステムを最初に出発させるときには、一挙に大量のファイルを作らなければならない。このとき、机の上に分類の山を作ってから、というようなことはしない。とにかくファイルとしてまとまるものは片っ端から最小単位で封筒に入れる。・・・普通の整理法では、まず秩序を作ってから収納する。それに対して、押し出し方式では、まず収納して、あとで秩序を作る。何も考えずにとにかく収納し、処置は後でゆっくり考えるのである。この点はきわめて重要だ。」（野口、p. 56）

### 時間軸による検索

「時間軸による検索は、きわめて強力である。なぜなら、①使用する書類の大部分は、最近使ったものの再使用である。②人間の記憶は、時間順に関しては強い」（野口 1993、p. 83）

### 知的生産は効率ではなく美学

「このような整理や事務の技法についてかんがえることを、能率の問題だとおもっているひとがある。しかし、じっさいをいうと、こういう話は能率とは無関係ではないにしても、すこしべつのことかもしれない。・・・これはむしろ、精神衛生の問題なのだ。整理や事務のシステムをととのえるのは、「時間」がほしいからでなく、生活の「秩序とすけさ」がほしいから

である。」（梅棹 1992、p. 80）

#### 「知的生産」関連文献リスト

- 板坂 元 1973 『考える技術・書く技術』講談社。  
板坂 元 1977 『続・考える技術・書く技術』講談社。  
梅棹忠夫 1992 『梅棹忠夫著作集 第11巻 知の技術』中央公論社。  
梅棹忠夫 1969 『知的生産の技術』岩波書店。  
梅棹忠夫編 1988 『私の知的生産の技術』岩波書店。  
木下是雄 1981 『理科系の作文技術』中央公論社。  
呉 智英 1987 『読書家の新技術』朝日文庫、朝日新聞社。  
酒井 寛 1992 『花森安治の仕事』朝日文庫、朝日新聞社。  
立花 隆 1984 『「知」のソフトウェア 情報のインプット&アウトプット』講談社。  
外山滋比古 1986 『思考の生理学』ちくま文庫、筑摩書房。  
野口悠紀雄 1993 『「超」整理法』中央公論社。  
野口悠紀雄 1995 『続「超」整理法・時間編』中央公論社。  
野口悠紀雄 1999 『「超」整理法3』中央公論社。  
林 望 2003 『リンボウ先生の書斎のある暮らし 知のための空間・時間・道具』光文社。  
山根一眞 1992 「怖いフレーズ」『梅棹忠夫著作集 月報』15: 6-8.  
渡部昇一 1976 『知的生活の方法』講談社。  
渡部昇一 1979 『続・知的生活の方法』講談社。  
渡部昇一 1981 『発想法 リソースフル人間のすすめ』講談社。

## 比較文化コース 配付資料「学術論文の書き方」(抜粋)

## 5 参考文献

(1) 論文の本文や注で言及した文献は、「参考文献」(あるいは引用文献、参照文献など、英文であれば Bibliography, References, Works cited など)として論文末尾にまとめて示します。

(2) 文献のデータは単行本と論文で異なります。

①和文の単行本の場合、著者、タイトル(『 』に入れる)、発行所、発行年をあげます。

例) 中村元『インド思想史』岩波書店、1968。

翻訳の場合は訳者名をタイトルのあとに補います。著者ではなく編者の場合、編纂者をはじめにあげて、「編」の語を加えます。

例) 上村勝彦・宮本啓一編 1994 『インドの夢・インドの愛』 春秋社。

②和文の論文の場合、著者、論文名、論題(「 」に入れる)、掲載誌(『 』に入れる)、巻数(あるいは号数)、発行年、該当ページをあげます。

例) 佐和隆研「密教における白描図像の歴史」『仏教芸術』70号、1969、pp.1-23。

また論文集などの形で単行本で出版されている場合、著者、論文名、論題(「 」に入れる)、掲載書(『 』に入れる)、発行所、発行年、該当ページをあげます。

例) 井狩彌介「ヴェーダ祭式の思考と世界観」『岩波講座東洋思想7 インド思想3』岩波書店、1989、pp.23-38。

③欧文の文献もこれらに準じますが、単行本の場合、出版社のある都市名もあげます。文献や雑誌のタイトル(和文で『 』で示す部分)はイタリック体にします。タイプライターやワープロがイタリック体を印字できない場合、アンダーラインを付けます。以下にいくつかの例をあげます。

単行本の場合

Tucci, G., *The Theory and Practice of the Mandala*, Rider & Company, London, 1961.

雑誌論文の場合

Turner, V., *Sacrifice as Quintessential Process: Prophylaxis or Abandonment*, *History of Religions*, Vol. 16, No. 3, 1976, pp. 189-215.

論文集の場合

Blyth-Hill, V., *The Conservation of Thankas*. In P. Pal. ed. *On the Path to Void: Buddhist Art of the Tibetan Realm*, Marg Publications, Mumbai, 1997, pp. 270-281.

(3) 文献を掲載する順序は、和文であれば著者の五十音順、欧文であれば著者のアルファベッ

ト順が一般的です。もし、和文と欧文の文献をあわせてリストにする場合は、アルファベット順が適当でしょう。同一著者に複数の文献がある場合、発行年順にあげます。

- (4) 注において著者名、発行年、ページ数のみをあげる方法をとった場合、参考文献のリストは著者名のつぎに発行年をあげると、該当する文献を探すときに便利です。

例) 中村元 1968 『インド思想史』岩波書店。

- (5) 研究の過程で参照した文献であっても、本文で言及していない文献はあげる必要はありません。また辞書・事典類も不要です。ただし、辞書類であっても、その記述に批判的な検討を加えたり、あらたな説を提示する場合などは別です。